◆ 巻頭言

「女性のためのスポーツ文化」を！

山口　理恵子

東北で未曾有の大震災が起こった2011年の夏、W杯ドイツ大会で「なでしこジャパン」が優勝した。この歴史的快挙の後、日本では空前の女子サッカーブームが到来した。国民栄誉賞の受賞からスポンサー企業の増加、国内リーグの観客動員数も増えた。

その一方で、選手たちは世間の盛り上がりに極めて慎重だ。2000年のシドニー五輪の出場権を逃した後、世間の熱は一気に冷めた。その前年の1999年に開催されたW杯で優勝したアメリカでも、数年でブームは過ぎ去った。世間に踊らされる女子サッカーの浮沈を彼女たちは痛いほど思い知っている。

よい成績を収めなければ女子スポーツは注目されず、人気も続かない。ロンドン五輪の結果が、今後の日本女子サッカー界の行く末を左右するとも言われている。かかるプレッシャーをはねのけて、のびのびとプレーしてほしい。

2008年北京五輪の選手の男女比は、58対42とほぼ半数に近い。日本では2004年、2008年の両五輪で女子選手の獲得したメダル数が男子選手を上回っている。にもかかわらず、今年２月に開催されたIOC*世界女性スポーツ会議では、いまだに「女性リーダーの少ない現状」が話題の中心であった。女性アスリートのめざましい活躍とは裏腹に、スポーツ界の変化は依然として遅い。

2008年から文部科学省は、オリンピックでのメダル獲得の強化に向けた委託事業、マルチサポート事業をスタートさせ、そこに女性アスリートの戦略的サポート事業も加わった。トップレベルの女性アスリートを支えるためには、既存の競技環境の整備と共に、女性が継続してスポーツを享受できるシステムづくりが鍵となる。一過性の人気に依存する女子スポーツではなく、女性一人ひとりのエンパワメントを支える「女性のためのスポーツ文化」をいかに構築することができるか。あらゆる女性の意見を反映させてほしい。

＊International Olympic Committee：国際オリンピック委員会

PROFILE

山口 理恵子
（やまぐち　りえこ）

城西大学経営学部助教。高校体育教員をめざし体育系大学に進学するも、部活動のセクシュアル・ハラスメント、女性選手のボディ・イメージなど、スポーツ界のジェンダー問題に関心をもつようになって現在に至る。共著『知って欲しい　女性とスポーツ』（サンウェイ出版）、訳書『Taking the Lead：カナダ発女性コーチの戦略と解決策』（文部科学省マルチサポート事業）他。